

甲陽だより

『焼きついたイメージの断片』

甲陽学院 高等学校長 小河清 磨

今の高校の玄関ホールに立って、東の方をみると、まぶしいばかりのグラウンドを通して、正門附近の植込みの松林と、旧枝川の堤の松林を眺めることができる。最近では、堤の松林もまばらになり、建物が目につくようになってしまった。

この玄関ホールの床には、大きく嵌め込まれた一九二九という数字が目にはいる。現在の鉄筋校舎の建設された年号である。

私達は、それぞれの学校に連なる色々なイメージを持っている。その学校に学ぶ生徒にとつて、或はそこに勤める教職員として、そこでの毎日の生活から、さまざまな印象を我々の中に残しているものと、今思い返している。

私自身のことでは、先づ幼稚園といえは、それがお寺に設置された幼稚園(神戸元町・善照寺内・常盤幼稚園)であったので、その広い前庭に縁え立っていた、洞穴のある銀杏の大木や、大きな釣鐘のあった鐘撞堂を思い出している。叱られると知りながら、その石垣をよじ登ろうとしたことなどが懐しい。小学校(市立神戸小学校)では、式の日の講堂での固苦しい雰囲気の中、鼻水をすすする

発行所 西宮市甲子園高瀬町3番7号 甲陽学院同窓会 電話西宮(078)41-6222番0623番 郵政振替 著者 原 清 印刷所 石川印刷出版社 神戸市兵庫区中津通3丁目3-6 電話神戸(078)375-3761(代)

音を聞きながら、いつもにらんだ正面右に掲げられていた『攻玉他山』の大きな額。これが今もはつきりと目につく。そして中学・高校といえは何だつたらう。私は旧制時代の甲南に学んだが、その本館前の一段下ったところにあった、当時では珍らしいくらい立派な屋外の板敷のバスケットコートかも知れない。体育の時間には、先生の「東洋一に集れ！」の号令一下、そのコートに走った情景がうかぶ。

大学はといえは、戦争中の時代だったせいか構内のことより、京都東山の北端にある大文字山の大字。教室の窓から見上げるその大文字の『大』の姿。或は下宿の部屋から寝そべてみたその山の姿など。しかし今、甲陽ではといえは、私はこの玄関ホールからの眺めが、強く印象付けられている。これは私が教師として、この甲陽で過ごしたためかも知れない。授業のたびに、職員室から一歩ふみ出し、グラウンドの方をみる時、いつもこの光景がそこにある。夏の日

のキラキラと輝いているグラウンドや、銀色のグラウンドに輝いてまぶしく照り返す光の中の雪のグラウンドなど、四季を通じての光景が走馬燈の

ように浮かんで走り去る。では新年度から始まる新しい高校では、どんな情景が印象付けられることになるのだろうか。新しい高校の正門を入ると、その通路のむこうにひらける茅津の海原の光景か。或は教室の窓から毎日眺める眼下の西宮の街並と緑の木々だろうか。或は講堂入口のホー

ルから西にむかって眺められるレンガ敷の中庭とそのむこうに連なる緑の六甲の山なみの光景か。などなど……。新しい校舎に移ってから、私に焼きついたイメージは、さてどんなものになるのだろうか。今この未知の期待に胸をふくらませている。

昭和五十二年九月十日(土)銀座六丁目進介氏のリードで、甲陽の日々を懐しみながら皆大きな声で斉唱した。最後に四十一回米田俊彦氏の音頭で、三々七拍子打ち、午後七時半全員感激の内に無事終了し、各回の二次会とへ散開していった。そもそも甲陽学院東京大会は第一回が五年前昭和四十七年に、旧職員の中川経治先生、中島久先生、および四十五回の西本頼正氏の尽力で開催され、今回は第二回目であった。今回も中川先生の提言で、たまたま居合せた先生の教え子四名(四十二回福田誠氏、水野学氏、四十六回徳尾和彦氏、四十五回井上良彦)が幹事團となり、五十二年三月より準備がなされた。八月

に中川先生が突然インドネシアのジャカルタへ赴任された後、残った四名は若輩ながら、第五回藤原研三氏のアドバイスを受けつつ具体的に準備を進めた。当日の受け付けには、四十六回桜井雅和氏四十九回東透氏五十二回木村俊次氏が心よく引き受けて下さった。会場のリザーブは新日本製鉄のご尽力である。なお東京甲陽会の会長には四回の加藤誠之氏にお引き受け頂いた。(四十五回井上良彦)なお次回

盛況の東京大会

52年9月10日 三月より準備がなされた。八月

各回からの幹事が同期生を紹介した。戦前卒業の方々はいずれも個性豊かで、ユーモアのあるスピーチが多く、戦後卒のサラリーマン中心の方々の折目正しいあいさつと好対照であった。ちょうど五十四回まで紹介が終ったところに、新幹線の架線事故で到着が遅れていた小河校長先生と合田氏が、参加者の拍手を受けて、会場に着かれた。お二人の甲陽学院と同窓会の近況報告で会は最高潮に達した。

甲陽学院歌と高校の校歌を四十二回橋本

回

理事会報告

五十二年度反省及び 次年度以降計画打合せ理事会

五二・一〇・一七

第58回卒 岡 正直

新校舎の移転に伴う諸件、名簿発行、広告依頼等種々協議するため理事会を同窓会事務室にて開催。三十三名の出席のもとに左の事項を決議しました。

① 夏季大会収支報告

- 収入 金七拾五萬七千五百円也
- 支出 金六拾六萬七千七百七拾五円也
- 差引 金九萬七千七百七拾五円也(剰余)
- ◎剰余金は雑収入として経常費組入れ。
- ◎ソフトボール(一ダース)バット(五本)は学校に寄贈する。
- ◎予約出席者の中欠席者も相当ありたるも突然の雨に見舞われ台帳に記入せず入場したるもの相当あり、総人員は約五百五拾余名と推察さる。
- ◎本年にて此の校舎に於ける最後の大会となる。

② 次年度開催方法

- ◎新卒業生と高工担任先生等の協力にてタレントの選定を重視する。
- ◎受付設置場所を考慮する。
- ◎新校舎見学会を主体とする。
- ◎新卒業生記念品
- ◎例年の通り認印を贈呈する。

③ 新校舎に同窓会としての希望

- ◎逐年に互い経常費より捻出の金額(金六拾萬円也)の使途。
- ◎天幕を寄贈することに決定。
- ◎名簿発行状況と協力

④ 発行部数を印刷の関係上二千部と契約してあり、現在予約一〇八六(九月末)にて相当数の予約増加の協力を依頼。新校舎移転に伴う同窓会事務

⑤ 新校舎移転に伴う同窓会事務

- ◎夜間集会の不便を解消するため中学校の使用懇請。
- ◎四月三日儀式にて開校式を学校職員、同窓会、育友会の代表者のみの範囲にて行われる。
- ◎新校舎新築及び六十周年記念行事
- ◎同窓生の著書、翻訳書の寄贈又は購入により在校生に閲覧せしむ。
- ◎図書室に書棚を設置する。
- ◎甲陽だよりに趣旨を掲載して協力を喚起する。
- ◎年会費収入状態(九・三〇、現在)
- ◎甲陽だより発行部数 六、一七八
- ◎年会費納入者数 一、九二九
- ◎未納者に対しては二月発行甲陽だよりに振替用紙を同封再度お願いすることにする。

以上のほか名簿発行に伴う広告掲載方幹旋を電通に勤務せられていた田島淳氏(二十五回)に依頼してあるので説明を聞く。各卒業期毎に協力を願ひ頒布額額の低減を計っている現況を了解してもらいたいとの申出があった。騒音のために移転するのは仕方ないのであるが母校の跡に何か記念するものを残し甲陽の校舎があった事を永久に記念したいことを法人に申し入れることを申し合せる等懇談した。

昔のイチゴ畑、枝川の流れ、今津の浜の海水浴より枝川、申川の正角州に甲子園の野球場、テニス場の建設と段々と姿が変わり、校舎も木造より鉄筋造りとなり、今また公害により苦楽園の山に移転と思えば世の変遷に愛着を残さすものがある。

第五十八回 夏季大会をおえて

第58回卒 岡 正直

八月二十七日、土曜日、本校において同窓会夏期大会が雨の中で行われた。大会は三時間ほどで済んだが、準備はすんなりできたわけではない。

四月に二回の打合せをしたが、何も決まらず委員さえ確定しなかった。五月にも二回の打合せをした。この時六名の委員が決まり、ゲストに藤本義一氏が決定した。しかしプロگرامはまだ確かなものでなかった。

最後の集会は八月九日、やっと確実なプログラムと前当目の準備の手順が決まった。そして委員はその他にも寄付や協力のおねがい走り回り、ゲームの賞品を買い「甲陽だより」の原稿を書いた。

前日の八月二十六日、新卒四十五人が手伝いに来てくれて、テントを張り、展示の準備体育館・講堂の掃除をした。終わった頃は雨であった。

二十七日午前中は晴れ。多くの新卒者たちが朝から働いてくれて運動場の準備は滞りなく進んでいた。清水さん、永井さんの御協力飲食関係の準備は万全である。受付も事務の方に手伝ってもらった。

講堂では演壇をすえ、マイクの準備もでき雑布がけもすませ、あとは会の始まるのを待つだけであった。

二時前には玄関の前で多くの人が集まっていた。年配の方から同年であった者までさまざまである。中には子供づれの卒業生もいた。

二時過ぎにゲストの藤本氏がおいでになった。藤本氏は裏門の方からいらっしやったのでそのまま入ってもらったが、やはり表から入ってもらわなければならないか。

講堂に入ってもらおうと言ったので、みんな入ってくれた。予想では三百五十人程だったので講堂がすくのではと思っていたが、五百人以上参会してくれて、そのような心配はいらなかった。

さて、いよいよ開会である。司会が開会宣言。まず原会長が紹介されて挨拶をされ、ついで小河校長が挨拶をした。挨拶は短くて大変よかった。残念ながら理事長は多忙でおいでにならなかった。

この頃から雨が降りだした。それも集中豪雨で締めた窓から雨が入ってくるほどであった。いや雨が入るほどの建物になっていた。すぐに第二部の会場を運動場から体育館に移すことにした。ここで藤本義一氏の登場である。藤本氏はしほい赤又はえび茶色のブレザーを着ていた。約一時間半、みんな退屈せずにおもしろく聞いていた。

藤本氏の話が終了司会者が花束を贈呈、これで第一部は終わった。中島先生が会場の変更についてアナウンスされ、みんな講堂から出ていった。

体育館では五十七回卒の今西さんに司会をしていただき、乾杯があり、それぞれが仲間どうし集まって飲み食べ話をしていた。食堂ではどうなっていたか分からない。

五時になりみんなで校歌を歌い、閉会の挨拶でこの大会が終わった。この後、新卒だけでなく清水さん、永井さん、先生方にも手伝っていたらいて雨の中を後かたづけをした。

今年も雨が降ってしまった。残念なことである。しかし盛会であった。ゲストはすばらしかった。新卒委員の不備な点は井上先生・石原先生・中村先生のおかげでうまくいった。

最後に御協力して下さったみなさまに対して深くお礼を申し上げます。

戸田仁一郎君を憶う

第二回卒 合田 孝治

在学中は水泳の達人で遠く伊勢湾に行き五里遠泳試験を前川君と共に出席し私等金雞連中を羨やました。慈恵医大に学ばれ良く歩いて副腎の作用を助けるようにと忠告を受けたことも記憶します。登山を好まれ日本、ルプスや、東北歳王、月山と足を延ばされたと聞いています。

昨年の会合はボーイスカウト西宮第六団のお世話で欠席せられたがそのとき大阪湾の汚染で水練が出来ないので地区小学校のプールを拝借し毎日指導しているとの便りがあつた。四十五年に大恩いせられても相不變泳いでいるのかと思うた。山も金剛山あたりには

屢々足を運んでいる様子でした。

本年初夏に六甲山に会合した際出席する返事があつたが、母の五十回忌と重って突然欠席せられた、その時二年先には祖父の百年忌を営むのだが、自分が一番長生きだと元氣な便りがあつたが、其の直後に訃報に接した。母校の近くで開業せられていたのですがお送りもせず残念です。

卒業後も鳴尾の浜で在学生の水泳には常に指導せられていたように聞いています。同卒の会合にはいつも医師の立場から健康に關しては親切にお話しせられていた。大患らい以来良く撰生せられ、ボーイスカウトの指導に専念し居られてた。良き友をまた一人亡くした、淋しさを思いつつ深く悼みを捧げます。

法人、学校、同窓会三者懇談会

五十二年十一月二十日、恒例の三者懇談会が合田相談役の肝入りで久ぶりに神戸の「かき十」において開催された。当日法人側から辰馬龍雄理事長、辰馬章夫本家酒造株式会社専務取締役、学校側からは小河校長、宮川、村上両教頭ならびに高三担任の上村、宮本、井上の諸先生方、同窓会側は原会長を始め遠く広島地から前会長の宮崎相談役がはせ参じられ、総勢十八名が出席、終始なごやかに有意義なひとときをすごすことが出来たことはご同慶の至りであつた。

席上、まず合田氏から会務報告がなされ、つづいて原会長が過般勲二等瑞宝章を受賞されたこと、同窓会から記念品(置時計)を贈呈したこと、謝辞が述べられた。そのあと新校舎移転にとまない甲子園の跡地に甲陽学院発祥の地として記念碑を建立したい、また出来れば同窓会館を建設することの再会を約束した次第である。

会員名簿整理についてお願い

前号にて御通知申した通り六十周年と新校舎完成の記念号の名簿を六月頃を期して発刊の予定にて着々準備を致して居ります。完備したものにしたいのですが、相変らず甲陽だより発送都度配達不能にて返送されてくるのが多いのです。転居通知が無い人でも何かのときは手落ちがあつたような電話を受ける場合があります。ハガキにて一寸通知下されば当方は名簿、カードの訂正は確実に行つて居ります、お互い他人の迷惑になること丈けは避けるよう注意を促したい。

- 七月発送に対し返送ありたる分
- 第五回 豊原大潤
- 第六回 石井晃男
- 第八回 増田金雄 西垣 浩
- 第十二回 上西隆夫
- 第十三回 鈴木定治
- 第十四回 森田与三郎
- 第十五回 菊池吉雄
- 第十六回 近藤雅美 前田寿治
- 第十七回 丸岡清兵衛
- 第十八回 南條武敏
- 第十九回 中務義秀、岡内正雄、森田隆夫
- 第二十回 福本隆久、広瀬与一、佐沼優一
- 第二十一回 田納 望 山本忠光
- 第二十二回 厚見俊男
- 第二十三回 八木 義 松中 実
- 第二十四回 尾本真一、西 邦佳
- 第二十五回 垂水辰男、中西俊一
- 第二十七回 渡辺敏也
- 第二十七回 梅垣策蔵
- 第三十回 小山昭次
- 第三十一回 長村俊男
- 第三十三回 松永謙也、松下政夫、中塚尚孝
- 第三十五回 佐々木四郎
- 第三十六回 寺井克弘、多木敏彦
- 第三十七回 太田哲次、松本行弘、星野彰
- 第三十七回 生松茂彦、鎌田吉進、山田一郎
- 第三十九回 今井秀志、三木好信、竹迫雄司
- 第四十回 佐藤 正、吉見健一
- 第四十二回 平谷 稔、矢野光男、下村 周
- 第四十三回 大野忠雄
- 第四十三回 高瀬由康、鯉谷信夫
- 第四十四回 川瀬秀和、大庭洋三、尾西正之
- 友園 隆
- 第四十五回 古出陽一、志方速夫
- 第四十六回 森 純也、吉井明夫
- 第四十七回 八尾 裕、千田哲雄
- 第四十八回 森 清
- 第四十九回 亀井 健、河原 啓、天野彰二
- 永来久和
- 第五十回 谷池義人、中畑 知
- 第五十一回 杉田匡太、上垣達文、森田裕二
- 第五十二回 平尾俊策、荒井栄司、世一英信
- 岡田重信、亀丸広司
- 第五十三回 伊藤 彰、伊東亮治、平井 朗
- 藤本祐三郎、横野泰慶
- 第五十四回 中塚真志、山本 均
- 第五十六回 田中明俊、丸山慶一
- 第五十七回 今村和男、瓜生 登、縄田 正
- 山本泰功
- 第五十八回 朝田 博、安田卓二
- 高商之部
- 第二回 太田 繁、泉 常一
- 第三回 阪田一夫、武田信弘
- 第四回 小笠原延安

会員だより

甲陽会 (第一回卒)

春の懇談会

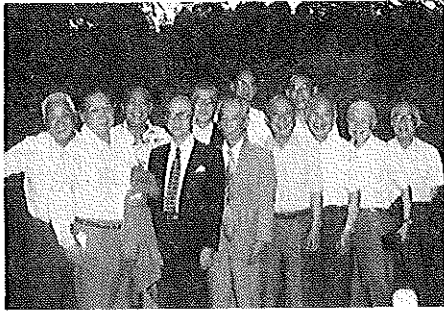
春秋のつどいが何時も夏となっている、梅雨時であったが晴天に恵まれて、七月二、三日一泊で六甲山 Y.M.C.A. 六甲研修センターで懇親会をもった。

盛夏の六甲山上の予約も至難なことであると思われて宮崎卯吉氏が昨年より手配して呉れたのである、若き時代の懐しい山である。山上流石に涼しい、都塵を離れて空気が何か甘いような感じもする。

夕食は肉すきで白鹿の銘酒(辰馬修一氏宅よりの御供養)で乾杯再会の嬉びを祝うた。同窓が亡くなり少くなりつつある淋しさと寄って話することは各自の保健であることが一入年だと感を深くせしめる。

欠席の返事の大半が病気であることも悲しい一つである、第一線に立って働いて居るものもあるのと思われる。

夕闇の中をセンター内を散策思い出話しを三々五々楽しんだのであるが昨秋この会合を



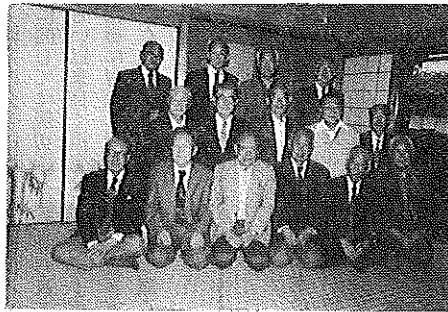
楽しんでいた熊倉氏が五月に亡くなられ当日出席を予定せられていた戸田氏も亡くなられて見れば悲報の連続の年でもある。

お互いに会合に出席して若き時代を語り余生を楽しむように努力しようでないか。一日の行楽、語らいが必らず心の慰安となることは確かな事と思う。

人生の終点に近いのである、万障繰り合せて参会して下さい。

秋の懇親会

秋の懇親会を広瀬氏の御世話にて十一月六日暖水尾にもつ。暖い晩秋が続いたのであるが当日はとうとう雨となり、生憎の嵐山駅よりのバスの中の景色の佳さを見る事が出来なかった。ガイドさんの説明では絶景であるらしいが



川と合流地点を更に登り水尾に至る。

農家が営まれている、とりすぎ、水だきである、袖風呂にて身を清め邪気を払うと云うのが名物らしいので入浴したが、昔懐しい五衛門風呂であった。

家族の人の膳立で食事したが、新鮮な野菜はなによりである。話題はどうも年を考えさせられる話になる、何時までも元気でなか、お互いに永が生きしょうとてか、一寸考えようでは情けないような事だ、未だ一線で活躍しているものがあるのと思う。

好天であれば少しは散歩したいような所であるが雨のためバスで行きバスで帰えるという味気ない懇親会となった。

餓饑の寺々を廻っている若い女の人達の多いのも昨今の流行と思われる、閑を見つけ休日にくらした事が方々にあるらしい。これも時代の流れの一つである。

卒業以来五十余年になる、神屋勝治(旧姓薩谷)氏が参加して呉れた。常連が一人、二人と減っているときである。嬉しいことであった。

甲十会例会に出席して

第四十二回甲十会の当番幹事としてひと言ご報告致したいと思えます。

会員各位には元氣カクンヤクとしてと云いたいのですが、既におのおの定年の齡いを早や数年前にとおり過ぎた面々の集いでありまして、半年或は一、二年振りにもみる各人の逢瀬ということとでそこに賑々しく談笑がたえない盛況ぶりであったことは何より嬉しいことでありました。

因て、当日の会場は、懐い出深い今津の街ほとり静かな料亭で催されたもので、ロートル(?)会員の足もとを考慮すると共に、その昔、青春を謳歌した学校に、ほど近いといふ感傷も加味したものでありました。

ところで久方振りに当番幹事の大役を受けた我々として、当座はいろいろ若干の不安は否めなかったのですが、然かし当日三十名余の出席をみたことでひと安心、過去例会より聊か多かつたことが当番幹事として、せめてもの誇りであり、倅せを感じた次第でありました。

とりわけ今回始めて、参加をしてくれました、川西君の元氣溢れる顔とその挨拶を受けに及んで想起されることは、我々面々が正十五年入学熟知以来ということでありま

す。

それより今日迄五十年余の歳月が経過しており、正に半世紀に亘る長期間の各自のおつき合いであったということでもあります。

今後斯る意義ある得難い交遊関係を大切にしていきたい、ゆめゆめ中絶などすることなくいついつまでも(?)永続していきたいものと今更どころ新にし、肝銘した次第であります。

今後とも会員皆さんのご参席、交遊のあらんことを念じてやみません。

末筆になつてご無礼いたしました、恩師朝田先生の態々のご参席を心から有難く御礼申し上げますと共にいつまでも先生にはご健康のほどを念願する次第であります。

甲十会より元氣で、万歳! 万々歳
五十二年六月十日(後山幹事)

名簿予約について

名簿発行について只今住所の訂正、広告の協賛お願い等いろいろと準備しています。

印刷の方とも価格を低くするため種々交渉を重ねたのですが部数の件について制限を受けていますので多数の予約が必要となりました。会員皆様様に於て予約(金二千円也)の末だない方の協力をお願い申し上げます。

住所の訂正もこの甲陽だよりが届きます、二月末に一応打ち切りたいと存じますので、知己の方で前号名簿に不明となっている人及び甲陽だより発行の都度掲載されている人でお知りの住所がありますれば是非御知らせ下さい。尚職業、電話番号の訂正も致し完全に近いものに致し度いで御本人よりの訂正通報もお願い致します。

十一月末迄現在にて年会費納入なき方には善意を促がす意味にて甲陽だよりと同封して再度お願いいたしますので協力下さい。

第四十三回 甲十会

於 西宮居酒屋長兵衛

甲十会は例会を重ねて既に四十三回になる。昭和六年第十回卒業だから齡まさに六十年才である。

会場は野田徳太郎君の胆入りで、ここが定例会場と定められているから、毎回の通知にも日時だけで済ませる位に徹底している。

定刻六時に先立つこと十五分位から、ポツポツ親しい顔が見える。大方は例会馴れした連中だから、ヨッコヨッコで、七面倒な挨拶は一切ない。「達者かいな」「まだ生きたか」「位のところお精一杯。一流パティーの出合いたいなお辭儀のキャッチボールは絶対にならない。この短い挨拶が、百萬言の世辭を凌ぐのである。

この会には無欠席の恩師朝田先生のお元氣な顔も見えた。当年とつて八十一才だそうなら、若干耳は遠いらしいが、眼も耳も足もそして口も達者の一言につきる。お目出度いことである。

定刻の六時にはほぼ今日出席通知のあった連中もそろった処で、本日の幹事丹羽敏郎君から開会の挨拶なのだが、よく見るともう誰やらビール杯を傾けているものもある。御持参のウイスキーの宴も既に始まっている。全くの無礼講である。

開会からおよそ二〇分も経ったかと思ふ頃、あつちの隅からピカッ、こつちの隅からピカッとフラッシュの閃光である。朝田先生御自慢のプロニカを首にかけ狭い会場内を歩き歩いての大奮闘はとて八才を超えた老人とは云えない馬力である。

酔が廻ったか「オイ酒がネーぞ」「ビールはこつちや」「オレはこいつのはたに座つて損した。当りが悪い」「声高な要請が狭い部屋中にピンピンする。これならいささかお耳の悪い朝田先生にもきこえそらだ。

甲陽ユベントス会への招待

同窓生の皆様、ユベントス(青春)の会に参加を呼びかけます。通称甲陽ゴルフコースコンペティションです。このゴルフの集いは次記の特色を堅持しつつよいよ第八回を迎えようとしています。

その一、サッカー部OBがお世話します。その二、一年六回偶数月の中旬の日曜日に名門コースで開く会です。

その三、自薦ハンディで初参加でも優勝権を認めます。その四、甲陽現役サッカー部後援費としてその都度金沓阡円を頂戴します。

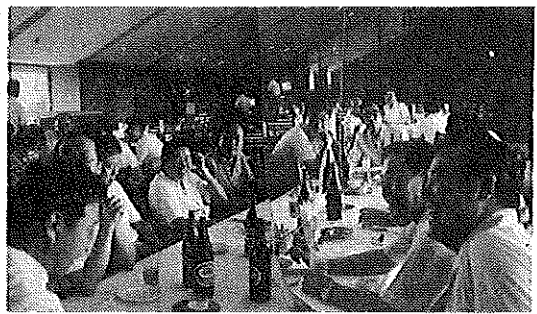
(参加費は賞品パティー代など参阡円程度です) 会長の 殿村和祥(二十四回)大阪ガス神戸支

この場では円高も不況もない。昔ばなしが出るかと思えば息子や娘、はては孫が何人出た話、ゴルフの話、話題は取り止めもなく飛躍し、決して一点に集中しない。従つて話に焦点も何もないが、只顔を見乍ら酒をくみ交わし、ワイワイ談笑することが最高の礼でもあり楽しみでもある。部屋のスミツコでポツンとしている奴は一人もない。

まだ酒も十分入っている銚子の中へ煙草の灰をボンと指で弾いたのを「一杯いこか」とすすめる。受ける方も「オーツすまん」と受けて中も見ずに一息に呑む。

沖すき鍋の中でのび切つたりどんを二、三本引すり出して皿に入れようとすが、手許が狂つてなかなか入らぬ、ツルツルッと飯台の上へトグロを巻いた奴を五本箸でつまみ上げて直接口中へ運ぶせつちがらがある。

この日の初顔はこの程東京からホームドラマウンド豊中へ引き揚げて来た多田弘男君、往



甲陽ユベントス会員 談する (52年8月のコンペ)

社長

キャプテン 吉村隆(三十二回)自營 会計 下村宏(三十七回)司法書士

この会は全ての甲陽同窓生の集りゴルフコンペを目指して頑張っています。既にホールインワンに輝いた人が二人、優勝者も野球・テニスなど多彩です。この甲陽紳士のゴルフ会へ老いも若きも、ふるつてご参加下さい。「よき時代の、よき友とゴルフを楽しむ」これをサッカー部OBがお世話しています。

日曜日に名門コースという条件では、せいぜい六組程度になりますので、申し込みは左記へ早いめにお申し付け下さい。

ステーション会館 代表者 吉村隆(32回卒) 電話〇六一三四五―四五六九番

年の反骨漢は流石に今もその精悍さを衰わないうが、年輪の箔を添えて押出しの良い紳士である。毎回一人でも二人でも新顔の見えるのは頼もしい。

瞬く間に八時になった。もうお別れの時間だ、次回の幹事は今回の幹事の絶対命令でまゐる。

「阿部薫君」「滝谷善衛君」両人が指名されてパチパチパチ。 滝谷君立って曰く「今日出て来た奴は今度も来なあかんぞ」これが新幹事の就任の挨拶だから驚く。それでいて違和感は全くない、非礼そのものが会の空気そのものだからである。

この日はまた川西誠次君から出席全員に手製の土鈴一個宛を記念品として寄贈された。土鈴の腹には昭和五十二年十一月二十二日K OYO甲十会43於長兵衛の文字・裏には懐しい帽章・胴には作者川西と銘も入っていると

朝日瞬一先生

- 阿部、井上、石田、宇野、岡川、川西
- 源太、白川、清水、次山、多田、高山
- 滝谷、武川、寺尾、野田、丹羽、浜田
- 平野、福井、福田、古川(博)、前田、丸尾
- 村地、山添、森津、山本(美)

(昭52.11.23 村地記)

「郁桜会の集い」

昭和15年卒、第19回桜組出身者二十七名のクラス会「郁桜会」についてご報告申しあげます。

皇紀二六〇〇年の良き年、東京でオリンピックが開かれるという記念すべき年でしたが、支那事変が激しくなり、A、B、C、Dの経済対鎖が始まった為、開催を返上した変化の多い年に卒業しました。

当初は、「一九〇会(イタオウカイ)」と名乗っていましたが、昭和五十年、皆勤者の一人であった。沢野郁君が不幸病氣にかかり、お見舞を贈る際に「郁桜会」と名付け、彼の葬別に際し、同君の名前を残して、この名に改称しました。

今年、九月十七(土)十八(月)第十二回大会を石切の青竜にて開催、晴天にも恵れ、集る者、五十嵐治男、井上実、香山一夫、金沢元三郎、川部正義、菊池正和、北村広、小林博、田中浩之、高山樹、中村興嗣、長滝二郎、橋本恭一、松井弘雄、宮崎司郎、吉野正太郎の計十六名になりました。

卒業後何回かは、戴先生を囲んで集っていたが、昭和十八年十二月の学徒出陣を機に戦火の渦中に入り、青春を固のために費して、戦後はチリヂリバラバラになっていったが、昭和四十年八月久しぶりに同窓会に出席、母校の講堂に落ち合った数人が発起して、同年十月に六甲の東洋ゴムの山の家に集食、それぞれ旧友の住所を探して、年々新しい顔ぶれを加えました。

六甲の翌年は、京都、次は伊豆湯河原、次は宝塚、神戸、倉敷、大津、箕面、亀岡、西宮、六甲、石切の順で十二回になりました。例えは、昭和五十年九月には母校甲子園校舎の最後の姿を見んものと職員室、校長室を訪問し、新しい若菜園校舎の完成のモデルを

拝見、小河校長先生にもお目にかかり、大変懐しく嬉しい会合を持ちました。

又、昨年は台風襲来の警報の中を六甲山上に集るなど伝統を築いて来ましたが。来年は、九月半ばに岡山県笠岡市神の島という瀬戸内海の島で我らがクラス委員長岡内正雄、副委員長香山一夫(いずれも岡山県在住)が当番で開催予定。できるだけ全員集合を期待してあります。

恩師戴先生も亡くなられ、戦死や病死で多くの友を失っただけに郁桜会に集れることの幸せをしみじみ痛感することあります。

第四十回(三十四年)卒

Cクラス同窓会

(幹事 橋本、中村記)

昭和五十二年八月二十七日大阪桜橋の「北京」にて久方ぶりに会がもたれた。当日は移転が決まっている甲子園の学舎で、最後の学院主催の同窓会も行なわれた。参加人数は十五名でややさびしい感もあつたが、卒業以来十八年目の顔もあり、白髪の方が多くなった小河現校長先生を囲み、高校生活の思い出話に花がさいた。

また職場は異なるが、それぞれ社会的に中堅の立場にあり、何処も同じ不況の中でがんばっている様子がうかがわれた。

最後に少し忘れかけた校歌応援歌を合唱して散会した。

なお次回幹事は原、守岡両君が選ばれた。今回出席できなかった皆様の次回の参加を期待する。

当日の出席者は、青木一弘、井邸晃之、勝山義男、小味測智雄、小村倫弘、杉浦哲雄、須原美士雄、高口恭行、中井正敏、長峯典治、原弘道、平谷稔、松本敏夫、安岡弘陽、山村俊郎、以上であった。(小味測記)

東京大会 次回幹事

(敬称略)

- 第一回 土居信三郎・第四回 加藤誠之・第五回 藤原研三・第八回 山崎秀夫・第九回 石山敏夫・第十回 森津常雄・第十一回 岩沢信一・第十三回 巻藤静彦・第十四回 富松信彦・第十五回 若林亮・第十六回 中屋重和・第十七回 石関素介・第十八回 小林年光・第十九回 今里恒雄・第二十回 小林英夫・第二十一回 福島茂太・第二十二回 当倉万寿夫・第二十三回 山中成一・第二十五回 山本二郎・第二十八回 宮川三郎・第三十一回 大村力・第三十二回 川西健・第三十三回 木村健・第三十四回 中谷清・第三十五回 長縄伸也・第三十六回 加藤孝一・第三十七回 宮里正望・第三十八回 高木正澄・第三十九回 林信行・第四十回 齊藤芳秀・第四十一回 川野家稔・第四十二回 橋本進介・第四十三回 川島弘三・第四十四回 大島勝郎・第四十五回 新宮敏一・第四十六回 田上洋三・第四十七回 山本和雄・第四十八回 藤本祥平・第四十九回 東透・第五十回 前田雄三・第五十一回 神戸朋之・第五十二回 木村俊次・第五十四回 林幸男

訃報

左の方々の訃報に接しました、謹しんで御報告申しますと共に御冥福をお祈りします。

- 戸田仁一郎 (第一回卒) 昭和五十二年七月六日
- 酒井 良平 (第四回卒) 昭和五十二年八月五日
- 小南 弘久 (第八回卒) 昭和五十二年七月二十四日
- 和田 亮三 (第八回卒) 昭和五十二年九月
- 國領 秀次 (高商第三回卒) 昭和五十二年六月三十日

昭和五十三年度

甲陽学院 入学志願者心得
中学校

一、募集人員 男子 約一七〇名
二、出願期間 昭和五十三年二月十三日(月)から二月二十三日(木)まで
上記期間中の日曜日を除き毎日午前九時から午後四時まで(土曜日は午前中)

三、出願手続
(1) 本校事務室で入学志願者名票、写真台紙、調査書用紙、入学審査カードを受け取る。(一組二〇〇円)
(2) 入学志願者名票、入学審査カードに必要事項を記入し、最近の写真(脱帽半身、名刺判五×七cm、規定の台紙にはりつけること)と審査料(八、〇〇〇円)とを添えて事務室に提出し、入学審査票を受け取る。

(3) 調査書は、二月二十四日(金)までに本校に提出できるよう出身小学校に依頼すること。(調査書は出願のさい父兄が持参されるか、又は出身小学校に郵送を依頼して下さい)
四、入学審査
(1) 考查内容 ①筆答考查 ②面接 ③身体検査 ④出身学校から提出の調査書審査

(2) 考查期日
三月一日(水)筆答考查(国語55分 算数55分 理科45分)
三月二日(木)筆答考查(前日と同じ) 面接及び身体検査(前半組)
三月三日(金)面接及び身体検査(後半組)
考查当日は午前八時二十分までに登校すること。

五、合格発表
三月四日(土)午後五時本校内に掲示する。合格者は発表後直ちに玄関受付で入学審査票と引き替えに、合格通知書および入学に必要な書類を受け取る。
◎合否についての電話によるお問い合せはご遠慮下さい。